わが魂の白百合

辻　憲男（文学部教授）

粟田山の一夜から六年後、登美子は中立売の姉の家を訪ねた。帰郷の途次だったが、逗留して療養するよう勧められた。津村節子の小説『白百合の崖（きし）』によると、義兄は美しい登美子の「讃美者」であった。新着の「明星」の寛（鉄幹）の詩を読むと、「登美子は、寛と過した短い逢いびきの鮮烈な思い出に、思わず眼を閉じて息を荒らげた。記憶の底に封じ籠めようとしていた二人だけの思い出が、なまなましく甦って登美子を苦しめた」。秋に寛らが京都へ来るという。気もそぞろに、その日の来るのを待ち暮らした。「別れも告げずに東京を去ったことを、未練を断つためにはかえってよかったと自分に言い聞かせていたのに、寛に会いたい思いは抑え切れぬほど高まっていた」。ところが少しの油断から、夕方になるとだるくて熱が出た。髪を整え着物まで替えたが、外出は叶わなかった。

思いがけなく歌に復帰し、大学英文科に入った。大阪出身の増田雅子とも知り合った。晶子と寛の間には二児があった。嫉妬の眼を感じながら、登美子は心から師を敬慕した。…あの不本意な結婚は二年で終わった。半年間の夫の看病が彼女をむしばんでいた。

登美子の歌は生命をいとおしむ。病中の作、

わが死なむ日にも斯（か）く降れ京の山しら雪たかし黒谷の塔

は悲痛、

しら珠の数珠屋町（じゅずやまち）とはいづかたぞ中京こえて人に問はまし

おつとせい氷に眠るさいはひ（幸）を我も今知るおもしろきかな

は明るい。歌の別れが心魂を研ぎ澄ました。

左京区黒谷の金戒光明寺。「しろ百合」は登美子の雅号。